

東京へ

平 英 男

梅雨明けを間近に控えたその日、私は東京行き新幹線『のぞみ』の車中にいた。節電で冷房が抑えられているのか、少し蒸し暑い車内は、日曜日の午前十時名古屋発という閑時にもかかわらず、ほぼ満席であった。久しぶりにゆったりとした気分になり、窓外の景色を楽しみながら、何をするとということもなくぼんやりと過ごす時間はとても貴重なものと思われた。

上京の目的は、東京フィルハーモニー交響楽団の定期演奏会の観賞である。私は学生時代、オーケストラでオーボエを吹いていて、卒業してからも名古屋の市民オケで活動していたこともあり、満更オーケストラの演奏に興味がないわけではない。しかし外国の著名なオーケストラならともかく、三重や名古屋でも今後聴く機会が多いであろう東フィル、しかも演奏曲はベートーベンのピアノ協奏曲

第四番と交響曲第三番『英雄』というポピュラーなもので、わざわざ鈴鹿から東京まで出かけなくてもいいはずである。でもこれには演奏を聴く以外のもう一つの目的があったのだ。

今年の一月から西村賢太にはまつている。西村賢太は言うまでもなく第144回芥川賞受賞作家である。中卒、フリーター、父が性犯罪者、自身も逮捕歴あり、それでいて大正時代の私小説作家『藤澤清造』に入れ込み、没後弟子を名乗り、清造の全集刊行を生涯の務めとしている不思議な男である。

最初は全くの興味本位からだった。ところが読み始めたらこれがまためつぼう面白い、『芥川賞受賞作品だけは必ず読む』という、まったく根拠のない枷を自分に課し、今までも受賞作の掲載されて

いる文芸春秋は買って読んでいたが、最近の受賞作は退屈なものばかりで「いったいこの作品のどこがいいのだろう」と疑問を持つことが多く、読むのが苦痛に思われることもあっただけに、久々の西村賢太の小説の面白さに胸がスカッとする思いであった。

そうなると、のめり込んでしまうのが私の性質で、出版されているものは全部読みたいとなり、本屋に直行し、無いものはインターネットで購入し、現在出ている九冊の単行本全部を読破することになった。

ここで西村作品の魅力を語るのは本意でないので省略させていただくが、文芸評論家の豊崎由美が『たぶん千人くらいのマニアしか賢太の良さはわからない』と何かに書いているのを読んで、私もその千人の一人に入れてもらえるのかどうれしかった。

その豊崎由美がこんなことも言っている。

『賢太ファンはみんな「賢太」って言うんですよ。あたし人のことを呼び捨てにできなくて、知らない作家のことも

何々さんって言うんですけど、その中で唯一私が呼び捨てにしているのが賢太なんです。名前がいいですよね』

その気持ちがとてもよくわかる。だから私も親愛の情をこめて、「賢太」と呼ぶことにする。

するうち、ますます賢太の魅力に取りつかれてしまい、『賢太の書いたものは全部読みたい』賢太のことは何でも知っていたい』と、まるで、韓流スターを追っかけるオバチャンはこんなもんかいな、と思われるような心境にもなり、『よし西村賢太が藤澤清造なら、オレは西村賢太だ』とばかりに賢太文献を集め始めた。賢太が若い二十代のころ心酔し、夢中になって自費出版で製作した『田中英光私研究』を始め、雑誌、週刊誌、新聞、インターネット、テレビ・ラジオ番組の録画・録音を蒐集し読み続けるうちに、どっぷりと賢太にはまっていた。

石川県七尾市の藤澤清造の墓と西村賢太の生前墓のある西光寺にも出かけ、墓の前で写真を撮り、それを携帯電話の待ち受け画面に設定し喜んでいるという、

恥ずかしいこともやっている。何でこんなに好きなんだろう、と思ってしまうが理屈ではないのだ。

賢太の作品は小説の面白さはもちろんであるが、随筆にも感銘度の深いものが多く、最近では、文藝界三月号の芥川賞受賞記念エッセイ『一日』新潮七月号『醜文の弊害』yomyom七月号『お礼参り』などに心を揺さぶられた。なかでも『一日』は賢太の不遇な状況、そこから這い上がろうとしてもがく心情などが、身につまされるようにわかり、読んでいて少し泣いてしまった。

アマゾンのWEB文芸誌にマトグロツソというのがあり、インターネットで無料が読むことができる。その紙上に賢太が『一私小説書きの日乗』という日記を公開している。よく食べ、よく飲み、賢太の人間味溢れるその連載は、私も毎週の更新を楽しみにしているのであるが、その中に『東京フィルハーモニー交響楽団の、公演パンフレットに一文を書き送稿』という記述があった。

賢太がクラシック音楽を聴いているということは、今までどこにも書かれていない。友川カズキや稲垣潤一、鶴田浩一や川中美幸のことは出てきたことがあるが、そもそも執筆中は音楽が鳴っていると気が散る、とも書いている。クラシック音楽に興味があるとは思えない。一体どんな文を書いたのだろう、と考えていたら無性にそれが読みたくなって居ても立つてもいられなくなった。そこで東京フィルハーモニー交響楽団の事務所にかのような内容のメールを送った。

…… 芥川賞作家、西村賢太さんが公演パンフレットに一文を書いた、という記事を見たのですが、それはどの公演でしょうか？ またそのパンフレットを手に入れることは出来ないでしょうか？
……

早速返信メールが来た。それはとても丁寧で親切な記述だったが、内容は非情なものだった。

…… 平素は格別のお引き立てをありがとうございます。御礼申し上げます。この度はお問い合わせいただきましてありがとうございます。

ございました。

2011年に創立100周年を迎えた当団では、各界でご活躍されている著名人にご寄稿いただいております。

4月は宇宙飛行士の野口聡一氏、5月はフアッションデザイナーの森英恵氏、そして6月は文学界から西村賢太氏にご寄稿いただきました。

西村賢太氏にご寄稿いただきましたのは、6月24日に発行いたします、6月定期演奏会プログラム冊子となります。こちらの冊子は6月定期演奏会の開催会場にご入場のお客様にのみ、配布するもので、一般の方への配布は行っておりません。もしご入り用の場合は、恐れ入りますが、下記対象公演のチケットをご購入の上、ご来場いただきますようお願い申し上げます。……………

こうなつたら行くしかない。年金生活の身上で交通費、入場料合わせて三万円の出費は痛いし、そんなどうでもいいようなことにお金を浪費するのは、このご時世、後ろめたい思いがしなくてもない。しかし賢太は藤澤清造の文献蒐集に

二千万円かけたそうである。それに比べたら、という思いと、何の楽しみもない隠遁生活を思えば、それくらいのは許される気もした。

早速ネットでチケットを手配する。幸いなことに六千円のA席が予約できた。

うとうととまどろんでいるうちに、列車は定刻通り無事東京駅に到着、山手線に乗り換え新橋で下車、銀座のヤマハに立ち寄り、楽譜とCDを物色、その後、隣の天国（てんくに）で天井の昼食、再び山手線で渋谷へ、

六月最後の日曜日、久しぶりの晴れ間のためか、渋谷の街は「どこにこんなに人がいたんだろう」と思われるくらいにこったがえしていた。

渋谷駅ハチ公口より徒歩七分、の案内通り会場のオーチャードホールにはすぐに着した。ドキドキしながら入場し、プログラムを受け取る。それは普通の単行本サイズの小型のもので、しかしページ数は55ページもあり、表紙は桜を思わせる淡いピンクがアクセントになっ

た、どことなく控えめで清楚なものだった。どことなく控えめで清楚なものだった。

賢太の文章は巻頭にあった。『ある感銘』と題した短い一文は、彼独特の文体と簡潔さで一気とその世界にひきこまれてしまう音楽の本質にせまったもので「さすが！」としか言いようのない名文であった。

私は会場に入るのも忘れてロビーに佇んだまま、何度も何度もそれを読み返していた。

新進の女流指揮者、三ツ橋敬子による東フィルの演奏は迫力のある、それでいて心に染み入るような温かいものだった。

『英雄』では学生時代にこの曲を演奏した当時のことが思い出され、なつかしく聴くことができた。二楽章の葬送行進曲は東日本大震災で犠牲になられた方々への鎮魂歌、四楽章は復興への高らかな凱旋の調べにも聴こえた。

……………音楽は決して一部の者のみが享受する、特権を有したものではない。古ぼけたトランジスタラジオより流れ聞こ

えたハーモニーは、思いがけずも格好の心の止血薬となった……

『英雄』のメロデーと共に、私の頭の中では賢太の文章が静かに、しかし力強く鳴り響いていた。